

主論文要旨

橋本紘樹

論文題目：初期ドイツ連邦共和国における知識人の諸相、自己省察から討議へ
——アドルノ、ハーバーマス、そしてエンツェンスベルガー——

「知識人」という概念が明確に意識されたのは、20世紀への世紀転換期にフランスで起きたドレフュス事件である。その言葉は、エミール・ゾラに代表されるドレフュス派の作家たちを指し、公的な場で知的批判を行う者を集合的に意味するようになった。こうした知識人の形象は、第二次世界大戦後にジャン＝ポール・サルトルによって最も体现され、「普遍的価値」のもと社会に介入する「普遍的知識人」と呼ばれてきた。

1980年代に差し掛かると、社会が高度に細分化していく状況下で、「普遍的価値」に依らない知識人の新たな可能性を探し求める動きが生まれてくる。例えば、ミシェル・フーコーは、「専門知」を基盤に政治的参与を行う「特定の知識人」の構想を練り上げ、諸専門間の交流を通じた、新たな総合的地平の保持を模索していた。一方1990年代になると、エドワード・サイードが、「専門知」のイデオロギー的使用の危険性を指摘し、国際社会で承認された「普遍的」な規則に依拠して批判を行う「アマチュアリズム」の重要性を説いた。また、近年ではアクセル・ホネットが、現代の公共圏では、メディアによる選別作用によって「規格化された知識人」が主流となり、当該の問題やそれに関する説明がどのようにして公的な場に登場するに至ったのか、その前提を「全体」として問う「社会批判」が欠如していることを指摘している。概して「知識人」をめぐる戦後の議論は、「普遍性」の素朴な標榜が不可能になった時代において、新たな包括的視点を確保し、公的介入の意義を問い直すという一点において共通項を持っている。

ただし、その点を除けば、知識人をめぐる解釈は常に多様である。その活動領域が、純粋な学問性や真理の追求とは別の次元で展開される「政治的活動」を含み込む以上、知識人の置かれた固有の歴史的状況を常に考慮に入れねばならず、一義的な規定は不可能であるからだ。定義や範型に拘泥するよりも、むしろ重要なのは、ある知識人像が歴史的な文脈の中でどのようにして培われ、そして時代の変遷の中でどのような反響を生み出したのか、という側面だろう。

こうした問題を考える上で、ナチスという全体主義の経験により、「普遍性」といっ

た一義的な価値観の持つ暴力性に警戒せざるを得なかった戦後のドイツ連邦共和国において、それも民主主義国家としての基盤が整う 1970 年頃に至るまでに活躍した知識人たちが重要な視座を与えてくれる。

なかでも、戦後に亡命先のアメリカから帰国し、フランクフルト社会研究所の再建やナチズムの「過去の克服」に精力的に取り組んだテオドル・アドルノ（1903-1969）の存在を忘れることはできない。アドルノは、主著『啓蒙の弁証法』や『否定弁証法』のテーゼ、ないしは学生運動の行動主義を批判し対立に陥った伝記的背景から、元来「否定性」に着目されてきたが、近年はその実践的側面にも注目が集まり、知識人論の文脈でも徐々に論じられるようになってきている。

デミロヴィッチは、先駆的かつ代表的な研究『非体制順応的知識人』（1999）において、アドルノ（およびマックス・ホルクハイマー）の当時のアカデミズムにおける知識人としての実践を考慮する必要性を説いた。それに従えば、アドルノは、社会批判のために取らざるを得ない社会との距離を「自己省察」することで、権威主義を回避しつつ、社会の一面的な発展を抑制できると考えており、そうした自らの理論に持続性を付与すべく、戦後ドイツに「非体制順応的知識人」が活躍できる場を制度化したのである。

しかしながら、アドルノは、デミロヴィッチが対象としたアカデミズムを超えたより広い領域で、すなわちラジオやテレビを通じて公的な場で社会批判を展開していた。そのため、本論ではメディア実践という観点を新たに付け加え、「自己省察」の内実を再考すると同時に、アドルノの知識人像において鍵となるもう一つの契機を導出することを試みる。すなわち、自らの権威性を抑制し、社会の改善に資するより良い認識を浸透させるために、他者との開かれた議論を志向する「討議」という契機である。

その上で、アドルノの知識人像が歴史的推移の中で生み出した反響に目を向け、保守派の思想家アーノルト・ゲーレン（1904-1976）を補助線としつつ、当時フランクフルト社会研究所で共闘していたユルゲン・ハーバーマス（1929-）を検討すると同時に、アドルノと批判的に対峙することで自己の詩人としての存在意義を問い直し続けたハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー（1929-）を取り上げたい。これまで究明されてこなかった三者の知識人像の連関を考察することで、アドルノを出発点とした「自己省察」や「討議」という契機が、思想と文学の境界をも越えながら、時代の展開の中でいかに別様の可能性に開かれていったのかが明らかになるだろう。（序章）

アドルノは亡命先のアメリカで、高度に発展する資本主義社会や大衆文化、並びにナ

チスというカタストロフィーの経験を前に、自らの思索をアフォリズム集『ミニマ・モラリア』に書き連ねていた。そこにはアドルノの知識人観を探る上で極めて重要な記述を見出すことができ、「普遍性」の主張が持つ疑わしさや「思考する主観性」という契機にくわえ、「討議」という問題圏も視野に収めた、「自己省察」的な知識人のあり方が問題にされている。そして、その洞察をもとに、論考『文化批判と社会』（1949）を分析すると、戦後ドイツへと帰国する際にアドルノが抱いていた、文化を切り口にした社会批判、すなわち「弁証法的批判」の構想が浮かび上がってくる（第1章）。

そうしたアドルノにとって、詩人ハインリヒ・ハイネの受容をめぐる当時の文化現象は、社会・政治的状況と密接に結びつくものであり、まさに自らの知識人観を実践に移すこの上ない機会であった。亡命先のアメリカでの講演『ハイネの再評価に向けて』（1948）と戦後の西ドイツでの講演『ハイネという傷』（1956）では、それぞれの発表の場や媒体に即して、ハイネ受容を切り口にした社会情勢への批判が展開されている。前者では、ハイネに関する議論が、とりわけアメリカにおいて高度に発展する資本主義社会への批判に結び付けられていた。一方後者では、アデナウアー政権下で「非ナチ化政策」も終結した1950年代当時の西ドイツ社会が、復古主義的で閉鎖的な雰囲気にも包まれており、それがハイネ受容と関連していることに焦点が当てられている。アドルノは、ハイネを抑圧する傾向の裏に、戦前の高踏的な文化人とナチスとの結びつきが今なお存続しているという事態を、ラジオを通じて聴衆に訴えかけながら、旧来の文化概念の保持と拡張を通じて、戦後ドイツ社会が抱える問題に取り組んでいたのである（第2章）。

1960年代になると、週刊誌『シュピーゲル』が国家機密を漏洩したかどで摘発されたことから、言論の自由を求める社会運動が展開された、いわゆる『シュピーゲル』事件により抑圧的な時代情勢が変化し始め、68年に向けてさまざまな抗議運動が芽生えた。特筆すべきことに、そうした時代情勢を前にアドルノは、亡命知識人と旧ナチス党员という垣根を超えて、保守思想家のアーノルト・ゲーレンとラジオ・テレビ対談を行っている。アドルノは対談において、『シュピーゲル』事件に端を発する社会運動を民主主義進展の萌芽として評価する一方で、68年の抗議運動において急進化し、行動主義的な帰結に向かう危険性のある学生たちを批判的に捉えている。抗議する学生たちからすれば、既存のメディアを通じて旧ナチス党员であるゲーレンと対談しながらも、「過去の克服」の問題を直接取り上げずに、自分たちに批判を向けるアドルノは、非常に権威

的に映ったことだろう。しかしアドルノからすれば、ゲーレンとの「討議」は、メディアを通じて「過去の克服」を実践的活動に移し替え、既存の社会を改善するための不可欠の一步であったのだった（第3章）。

ハーバーマスは、すでに1950年代から新聞や雑誌を通じて、哲学や文学、ないしは時事問題に関する所見を発表していただけでなく、1960年代には他ならぬアドルノと共闘して、急進化する社会情勢に向き合っていた。にもかかわらず、これまで当時のハーバーマスの知識人観はほとんど問題にされてこなかった。その原因は、この時期に、知識人論に関するまとまった論考が発表されていないことにある。そこで本章では、アドルノを参照軸に据え、『公共圏の構造転換』（1962）と『認識と関心』（1969）といった主著を、知識人と社会という観点から再考した。ハーバーマスは、1960年代初頭から末にかけて社会改良の波が湧き起こるなかで、「自己省察」と「討議」に依拠した社会への介入の可能性を探っていたのである（第4章）。

アドルノ同様、ハーバーマスにとっても、ゲーレンは理論的な示唆を与えてくれると同時に、同時代の保守知識人として向き合わねばならない存在であった。ハーバーマスは、ゲーレンの著作『人間の原型と後期文化』（1956）と『モラルとハイパーモラル』（1969）に対して、それぞれ『諸制度の崩壊』（1956）と『偽装された実体性』（1970）というタイトルで新聞・雑誌に書評を発表している。そこでは、「制度」における「規範」と「個人性」の歴史的な相関関係をどう捉えるべきか、という問いに焦点が当てられ、西ドイツという「国家」制度にも言及されている。そうしたゲーレンの著作の解釈を参照軸として、1968年6月2日にフランクフルト大学のメンザで学生たちに向けて行われ、数日後に日刊紙『フランクフルター・ルントschau』に掲載されたハーバーマスによる学生運動批判『見せかけの革命とその子供たち』を検討することで、民主主義的制度の保障たる西ドイツ国家に対する彼の視線と、知識人としての振る舞いが浮き彫りになる。ハーバーマスは、歴史的過程と個々人の自由との連関を「自己省察」し、その上で「討議」を行う重要性を、学生たちとの実際の議論の中で身をもって訴えていたのだった（第5章）。

エンツェンスベルガーにとって、「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮である」と告げたアドルノは、いわば文学と思想の境界を超えて、社会における自らの詩人ないしは作家としての意義を再考させると同時に、乗り越えねばならない存在でもあった。その問題意識は、初期の往復書簡に始まり、ネリー・ザックス論『自由の石』（1959）

を経て、『詩と政治』(1962)から『意識産業』(1962)に至るまで一貫しており、『シュピーゲル』事件を皮切りに、1960年代初頭からの時代情勢の変化のもと知識人による社会問題への介入が活発になるなかで発表された詩集『点字』(1964)にも流れ込んでいる。従来、詩集『点字』は非政治的とみなされており、1965年創刊で学生運動にとっても極めて重要な意味を持つことになる雑誌『時刻表』以後のエンツェンスベルガーの活動との間には断絶があるとされてきた。しかし彼は、詩や文学であるからこそ果たしうる社会的役割を常に模索し続けていたのである。(第6章)。

『時刻表』では、文学と政治の隔たりを取り除くべくさまざまな社会的テーマが扱われた。なかでも、「第三世界」は学生運動にとって焦眉の課題であり、『時刻表』が貴重な情報源の一つであった。帝国主義の抑圧を排除するために、そして、現地での解放運動に範を取るために、革命の実現を志す学生運動は「連帯」を主張していた。エンツェンスベルガーは、自らキューバを訪れた経験も踏まえながら、「第三世界」と西ドイツの媒介者として存在感を発揮していたのだ。それと同時に、1968年に立て続けに発表された小論『ベルリンの常套句』や『ベルリンの常套句II』、および『常套句、最新の文学に関連して』から読み取れるように、彼は文学と社会の関係を常に思い悩み、作家であると同時に知識人であることの可能性を終始追求し続けていた。その意識が作品という形で端的に表れているのが、学生運動自体は下火となるも、一部の過激派がエスカレートに向かう最中の1970年に発表されたドキュメント文学『ハバナの審問』である。エンツェンスベルガーは、いわばキューバ革命の黄金期を文学の題材にしながら、解体を遂げる学生運動に対し「自己省察」を促し、「大いなる対話」という「討議」に基づく長期的な社会変革のプログラムを始動させようとしていたのである(第7章)。

アドルノを出発点とした、知識人の「自己省察」と「討議」という契機は、ハーバーマスとエンツェンスベルガーにより共有されつつ、時代の変化とともに、それぞれに異なる形で展開されていった。ある知識人像の反響を当時の時代状況に即して検討してきた本論の考察は、常に変転し続ける社会において一つの模範像の形成が不可能ななか、歴史的に成立した知識人像の可能性をいかに押し広げることができるのか、という問題に取り組む上でも、重要な視座を提供するものである。